Ⅳ－31

新聞による土木遺構の発掘記事とその活用状況に関する研究

日本大学工学部 大学院　学生員　○安保　堅史
日本大学工学部　　正会員　　藤田　龍之
　　正会員　　知野　泰明

１．はじめに

ここ数年、三内丸山遺跡の発掘などをきっかけに、発掘遺構に対する関心が高まっている。また、その土地で見つかった遺跡や遺構などの文化財をまちづくりのシンボルとして活用しようという動きも珍しくなく、それら発掘遺跡や遺構には土木に関連しているものも数多い。本研究では、実際に発掘された土木遺構が発掘調査後どうなったのかということや、その遺構が保存・活用されている事例としてはどのようなものがあるのかを知るために、全国の発掘に関する新聞記事をもとにして、土木遺構の扱いの現状を把握し、今後の遺構の活用のありかたについて検討してみたものである。

２．研究方法

本研究では「月刊文化財発掘出土情報」でまとめられた全国の新聞記事から遺構や遺物、遺跡の発掘記事や考古学的な発見、話題に関する記事を抜き出し、掲載している雑誌から１９９３～１９９７年までの土木遺構の発掘に関する記事を抜き出し、この期間内でどのような遺構がどれくらい発掘、あるいは調査され、その中で実際に保存・活用されているのはどのくらいの数になるのかということを表にまとめた。また、保存・活用されている場合にはどのような方法でなされているかという代表的な例をまとめてみた。なお検討する土木遺構に関しては、実用的であったと思われるもののみを抽出し、祭祀目的とされるものに関しては省略した。

３．分類項目の設定

本研究で記事を分類するために次のような項目を設けた。**「列石・石積み・配石」**：石を使った構造物で、それを並べるか、あるいは組み合わせることなく積み上げたという比較的単純な遺構。**「石垣・石組み」**：石を使った構造物で、城址や館などの基礎部分にあたる遺構。**「堀」**：集落や城、館の周りを囲うようにして堀った溝。石材や木材などで護岸してあるもの。**「環濠」**：集落や城、館の周りを囲うようにして掘った溝。素掘りのものや、時代が中世以前の古いもの。**「土坑」**：地面に開けられた穴。その目的は様々である。**「土塁」**：土を積み上げた構造物。盛り土。**「堰」**：堰遺構。**「堤」**：堤防遺構。**「井戸」**：材質に関係なく使用目的が地下水の汲み上げであるもの。**「水田」**：水田、あぜ道など。**「用排水路」**：灌漑のための用水路や、生活廃水、雨水を流したと考えられている水路遺構。**「池」**：池遺構。庭園内にあったものや集落内にあったものなど発掘場所に関わらず全て。**「水場」**：水洗い場や、あくを抜くため使われたと考えられている水さらし場。**「橋」**：川に架けられるそれと、土橋も含む。**「木造・竹造遺構」**：遺構の部材が木材か竹材のみでできているもの。樋管など。**「道路」**：大規模遺構の一部として見つかる道路や、街道など。**「庭園」**：庭園遺構。なお、この条件にいくつか重なっているものに関しては、あてはまる項目全てに含めて計数した。

４．結果および考察（表－１を参照）

発掘遺構総数に対する保存・活用数は（表－１）のようになった。発掘総数に対する保存・活用されている遺構は非常に少ないということがわかる。遺構分類としては、「石垣・石組み」や「堀」「土塁」など、城に関するものが多く、「環濠」や「水田」など、大規模な土工遺構は活用されているという記事がなかった。代表的な活用方法は、城址遺構全体を復元し公園化している事例がほとんどだった。

4.1 遺構保存の具体的な方法

遺構保存の方法としては、まず遺構を現状のまま保存するという方法がある。しかし、土木遺構として発掘されるものの多くは、石垣や土塁・濠であり、そのまま保存しても予備知識のない人がみた場合、どれくらいの建

物や遺構がどのように立っていたかどうかがわかりにくい。また石造構造物以外の土工構造物では雨による侵食、木造構造物には腐敗などで失われてしまう恐れがある。これが現況で石造構造物が多く保存されていることの理由の一つとなっているように思われる。ほかにも、石造構造物に保存が偏ることの背景には、土工構造物や木造構造物は、代表的な石造構造物の城址のように良く知られていて、もとから地上に見えるかたちであったり、山城のように人里離れた場所にあるのではなく、何らかの開発に伴ってはじめて見つかる事が多く、最終的には構造物を建設するのが目的であるので、その時代の人々の生活を知る上で重要な遺構であっても保存まではなかなかできず、記録のみの保存が多くなってしまうようである。構造物の場所を移すという方法も考えられ、比較的小規模な工事で遺構もあまり大きくない場合には行われていることも多いが、大規模な公共工事で、遺構の規模が大きくなる程難しくなるようである。

4.2 遺構活用の具体的な方法

遺構を活用する方法としては、その遺構を復元（復原）するという方法が多く用いられている。その手順は、まず責任者である市町村などが土地を買い上げ、公共用地にしてから整備工事おこなう。そのため多大の経費がかかり、経費はすべて税金で賄われる。ゆえにその復元された場所は一般に公開されなければならない。この考えのもとで行われているのが城址や館跡などで多く行われている「史跡公園」づくりである。たしかにこの方法で公園化された史跡は地元の人々にも親しみやすく分かり易いという利点があるが、観光地化したことにより、駐車場や売店、トイレなどの設備のために遺跡が一部損なわれたというケースもあるようである。また、この方法は城址や館跡などには良いが、土工構造物などには不向きである。

以上を踏まえて、本研究で提案できることは、有効範囲が限られている史跡公園以外の形態としての活用案として、実際にその遺構が機能しているところを再現出来ればそれが最も良いのではないかということである。これはすでに河川などで行われているが、伝統的工法の応用がその一つの回答なのではないかと思われる。

5．新聞を資料とする場合の利点と問題点

本研究では新聞をもとに行ったが、これは現在の土木遺構全体の保存・活用状況を把握する場合に、その速報性により短期間でデータ処理を行うことが出来るということがあるが、検討範囲が短いと、記事の多くはその発掘内容やその遺跡のもつ意義などに文章の多くを割いているため、より具体的な「保存・活用方法」や実際の「保存・活用状況」をみることは難しいようであった。そのため、今回は具体的に「保存・活用の動きが活発になってきている」ということを数字としての流れでは示すことは出来なかったが、十分な抽出期間を取ることによりこのことは解決可能であると考えられる。

表－1

	発掘総数	保存・活用数	代表的な活用方法
列石・石積み・配石	116	5	モニュメントとして活用
石垣・石組み	157	27	復元、史跡公園へ
堀	192	14	復元、史跡公園へ
環濠	92	0	なし
土坑	77	2	シリコンなどで固定、展示
土塁	79	8	史跡公園の一部として保存
堰	16	1	構造物を復元、機能そのまま利用
堤	26	1	史跡公園として保存
井戸	145	3	史跡公園の一部として復元
水田	81	0	なし
用排水路	105	3	埋め戻して復元する
池	24	1	建設予定場所を移し、修復後保存へ
水場	18	1	史跡公園の一部として復元
橋	34	1	復元・利用
木造・竹造遺構	44	4	地方公共団体が保存
庭園	25	2	復元し、再現
道路	108	4	建設予定場所を移し、修復後保存へ

新聞記事にはその時期に人々が何に多く関心を抱いていたか、ということがある程度反映されるということがある。活用に際してその意見が参考になることが少なくない。実際に、発掘記事の他に「発掘遺構の保存」や「埋蔵文化財を生かしたまちづくり」に関する記事やコラムも増え、行政側にもそれを支援する動きがある、という記事が多く見られてきていることから、「遺跡は無駄なもの」から「保存・活用するもの」に世論が変わってきていることが伺える。今後は、この手法をより発展させ、どのようにすればより有意義に土木遺構を活用できるかということについて研究を進めて行きたいと思う。

参考文献　（株）ジャパン通信情報センター：「月刊 文化財発掘出土情報」，1993～1997